

SSS

日本書局出版

暉峻康隆対談集

西鶴粹談

有吉佐和子

田地位文子

開高健

郡司正勝

瀬戸内晴美

田辺聖子

西沢裕子

藤本義一

水上勉

吉行淳之介





小学館創造選書

暉峻康隆対談集

西鶴粹談



暉峻 康隆 (てるおか やすたか)

1908年鹿児島県志布志町に生まれる。

1930年早稲田大学文学部国文学科卒。

早稲田大学教授を経て、現在早稲田大学名誉教授。文学博士。

主要著書

『西鶴—評論と研究』(全3冊) 1948~1953年・中央公論社

『蕪村—生涯と芸術』1954年・明治書院

『元禄文芸復興』1966年・至文堂

『江戸市民文学の開花』1967年・至文堂

『井原西鶴集(一)~(三)』(共著) 1971~1973年・小学館

『定本西鶴全集』(共編) 1948~1975年・中央公論社

『現代語訳 西鶴全集』(全12巻) 1975~1976年・小学館

小学館創造選書⑤ 暉峻康隆対談集 西鶴粹談

昭和55年5月1日 第1版第1刷発行

©Yasutaka Teruoka 1980

——検印廃止——

著者代表 暉 峻 康 隆 定価 880円

発行者 相 賀 徹 夫

発行所 小 学 館

〒101 東京都千代田区一ツ橋2-3-1

電話 編集 東京 (03)230-5704

製作 " (03)230-5333

販売 " (03)230-5739

振替 東京 8-200番

印刷 活 版 有限会社 萩原印刷所

オフセット 町田印刷株式会社

製本 中央精版印刷株式会社

Printed in Japan

- ・造本にはじゅうぶん注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。
- ・本書の一部または全部を無断で複写複製(コピー)することは著作者および出版社の権利の侵害になりますので、あらかじめ小社あて許諾をお求めください。

目次

まえがき……………暉峻 康隆…6

源氏の雅と西鶴の粹……………円地 文子…9

現代語訳の苦心／日本語のむずかしさ／一代男について
／雅と粹／世相と心中／西鶴文学の特色

“評論家”西鶴……………西沢 裕子…33

西鶴はどのようにして書いたか／作家と孤独／町人の粹
とカタルシス／評論家としての西鶴／小説とはなにか

本音の作家……………水上 勉…57

在所ことば／本音と建前／小説のエキス／無常観と業

文学たり得た男色……………郡司 正勝…81

日本人の精神構造／男色の時代的推移／男色大鑑の背景
／近世の美

女の業——……………瀬戸内晴美…101

西鶴とのふれあい／女の業／一代女と女の性／西鶴の描
いた世界／西鶴の出家

西鶴の魅力……………田辺 聖子…127

小説作法／文体のこと／大阪気質／廓は“極楽”／文学
とは

西鶴・三婆・一代男……………有吉佐和子…149

死に残りたる婆あり／可愛い男／男の夢・女の夢

“大阪人”西鶴……………藤本 義一…169

西鶴との共通点／西鶴と近松／大阪人の考え方／大阪弁
とポルノ／虚業と実業

西鶴の文学風土……………開 高 健…189

阿蘭陀西鶴／「いらち」ということ／上方と江戸／男と
女／大阪作家

西鶴とエロス……………吉行淳之介…217

かなづかい／流行作家ということ／当時のセックス観／
世之介のモデル／なぜポルノを書かなかったか／小説作
法の近代性

装幀・玉井ヒロテル

暉
峻
康
隆
対
談
集

西
鶴
粹
談

まえがき

ユネスコで作制中の世界の歴史に残る偉人リストである「偉人年祭表」の、一九六六年版にランクされた紫式部、一九六七年版の夏目漱石について、一九六八年版に井原西鶴がランクされてから、すでに十二年になる。西鶴がランクされたのは、代表作が英仏独露で訳され、世界各国で読まれた結果、世界的古典作家と評価されたからにはかならない。

ところが中世以来、作歌の最高の参考書として、ひろく読みつがれてきた「源氏物語」とちがって、町人階級がもつとも栄えた十七世紀末の元禄時代が生んだ大阪町人作家・西鶴の作品は、雅俗折衷体で俳文的な簡潔さを特色とする文章の難解さや、謹厳実直な儒教道徳にはばまれて、明治以後も国民古典というにはほど遠い存在であった。しかしその現実主義的な作風は、日本のリアリズム文学の原点として、いち早く近代の作家や評論家の注目するところとなった。近代明治文学の担い手として登場した紅葉・露伴・一葉らは、それぞれ西鶴の文体や構想などを吸収してスタートしている。やがて明治三十年代後半の自然主義時代がやってくると、島村抱月、正宗白鳥、田山花袋、真山青果といった評論家

や作家たちによって、西鶴は日本の自然主義の原点として見直され、評論に研究に創作に、大きな影響を及ぼすにいたった。続く大正時代になると、白樺派の志賀直哉は、西鶴の簡潔な文体やリアリズムに着目し、短編作家としての西鶴に注目した菊池寛は、みずからも短編作家としてすぐれた手腕を発揮している。

プロレタリア文学が浮上した昭和期に入ると、それまでほとんど評価されることのなかった西鶴晩年の町人物、とくに「世間胸算用」の社会的視点と、その画期的な集団描写の方法に照明があてられ、西鶴を終生の師と仰ぐ大阪出身のプロレタリア作家・武田麟太郎を生んだ。その武田にみとめられて文壇にデビューした、同じ大阪出身の作家・織田作之助も「西鶴新論」を書き、創作においても西鶴の影響がいちじるしい。その織田と新人として並び称せられた太宰治も、昭和二十年に西鶴の諸短編をアレンジした「新釈諸国噺」を発表している。また終戦直後の一時期、「世間胸算用」の集団描写の方法を活用した「当世胸算用」その他の作品を書いた丹羽文雄等々については、私も再三述べるところがあったし、かなり行き届いた諸論文を見うける。しかしその後の現代作家たちが、西鶴をどのように享受しているかについては、まだこれというレポートもない。

昭和五十一年三月から、「現代語訳 西鶴全集」（全十二巻）を小学館から毎月刊行するにあたり、月報の原稿をどうしようかと思案しているうちに、よい機会だから、西鶴に関心のある、もしくは作風が西鶴に近似している現在活躍中の作家たちと対談してみようと

思い立った。一つには外側から手さぐりで考察するよりも、それぞれの作家の証言を得るにしくはなしと思ったので、かねて目星をつけていた友人でもある十人の作家と対談する運びになった。多忙な皆さんが、いずれも進んで応じてくださったおかげで、こうして戦後昭和の証言を残すことができた。まことにありがたいことである。しかし月報では対談の半分ほども割愛せざるをえなかったのだ、今回再録するにあたり、できるだけその部分を再生してもらうことにした。十人の皆さんに重ねてお手数をかけたことをお詫びするとともに、深甚の謝意を表します。それにしても、東京育ちの作家たちの西鶴への共鳴はより知的であり、大阪育ちの作家たちの共鳴はより体質的で、地縁の深さがわかったことは、何よりの収穫であった。

昭和五十五年如月吉日

暉峻康隆識



東京生。幼時から歌舞伎に親しみ、文学的教養の素地となった。二十一歳のとき、戯曲『ふるさと』が懸賞に当選、以後創作活動を始める。主な作品に、『女坂』『女面』『朱を奪うもの』(三部作)、『なまみこ物語』『彩夢』『遊魂』などがあり、最近作の『食卓のない家』は日本赤軍の浅間山荘事件を扱って話題をよんだ。昭和四十七年には『源氏物語』全五十四帖の口語訳を完成している。国語学者上田万年の二女。

源氏の雅と西鶴の粹



円地 文子
暉峻 康隆

現代語訳の苦心

円地 現代語訳、さぞたいへんでいらしたろうと思います。同じ古典でも西鶴はことにむずかしいですね。

暉峻 いや、「源氏」もむずかしいですよ。あなたも、「源氏物語」の現代語訳という偉業をなしとげられましたね。ずいぶんご苦労なさっていたのを知っていました。

円地 はい、お手紙をいただいたことがございましたね。

暉峻 いや、あなたも目をわるくなさるほど「源氏」を……。

円地 私はなんにもご褒美^{ほうび}をいただかないで、目だけわるくしましたの。

暉峻 平安朝の文学に、目のことはあまりでてきませんね。だいたい光源氏は老眼にならなかった。(笑)

円地 そうでございますね。でも盲人は多かったのではないでしょう。特別の人のほかは、こまかい字なんか見なかったでしょう。

暉峻 案外ぼくは、平安朝は目がわるくならなかったように思うのです。日が暮れて本も読めないといっているから、暮ればなんにも読まないし、みんな暗いところで愛し合っているんだ

から……。

円地　そして、早く死にますから。

暉峻　平均寿命が四十歳前後だから、老眼になるひまがない。(笑) いや、ほんと。

円地　光源氏なんか、五十すぎまで生きたようですから、まあ、長いほうかしら。今は寿命ばかりのびて、生活環境が悪くなっていますもの。いいことございせんわね。

暉峻　ほくももうトシですが、仕事の欲だけはだんだん強くなつてね。

円地　そうなんです。私も目が見えなくなっちゃってから、ほかのことはみんなだめになつてゐるんですけども、書きたいという気持だけはありましてね。読まないでいるから、なおなんでしょうけれども、こんなことも書きたい、あんなことも書きたい。やっぱり、業が深いんでしょね。

暉峻　人間はいろいろな業をもっているけれど、書くことが業だなんて、業としてはいいほうですよ。(笑)

円地　だから、文学なんていうのは手持ちのものだから、書くことをやめたとしても、しばらくすれば、なからまた芽をふいてくる。そういう新しいものが自然にわいてくるのが文学なんですね。ガタガタ書きつづけてるのは、自分で氣に入らないんだけど、今も「源氏」の手直しをしています。主にテニヲハ程度ですけれども、決定版をつくっておきたいと思ひましてね。

暉峻　ほくも、またこれから直そうと思うのですが、いったいどこまで直せばいいのか。年を

とっていくと、いろいろなことが少しづつわかってきたり……。

円地 自分の考えも変わってまいりますね。

暉峻 ところが読者には、そのどっちがいいか、わかりませんですね。

円地 読者の年代層がどんどん移っていきますから。

暉峻 これは、そうなると、読者の問題じゃなくて、自分が満足すればいい。しかし、満足するときは、たぶんないでしょうな。(笑) 現代語訳といっても、でてくる人間はみんな、ちょんまげを結^くった十七世紀の人間ですから、そういう時代の人たちが、絶対に使わなかった現代のことばは、なるべく使わないようにしました。

円地 そうすると、困るのは、現在使われていて、非常に感じが変ってきていることばがありますでしょう。たとえば「すごく」ということばは、「源氏」にもありますし、意味もあまり変化しないでずっときているのですけれども、このごろの若者たちが「すごーく」……。

暉峻 「すごく」っていうんですよ。氣持わるくてね。

円地 谷崎潤一郎さんが「源氏」をお訳になった時分は、あまり抵抗なく「すごく」とお使いになったと思います。ところが、私が使おうと思うと、いやで……。

暉峻 それでね、ぼくは若い人たちに頼んで訳したものを読んでもらい、わからないことばをチェックしてもらったんですよ。そしたら、もうチェックだらけ。(笑) 戦前派のわれわれの日本語は、戦後派の人にずいぶん通じなくなってきた。

田地 そうなんです。私なんか、小説書いてましてもね、三十代か四十代になっているかもしれない文芸時評の方なんかでも、こんなことばがあるのを知らなかったって……。『猫が香箱かうげいを作る』って書いたんですよ。

暉峻 ああ、背を丸めてうずくまってることね、形が似てるからでしょう。でも、香箱とか、そんな話じゃないんですよ、このごろの連中は。(笑) もう「色目をつかう」という下世話なことばがわからない。

田地 「色気」でもね、私なんか使う「色気」というのは、一種の艶つやとかしら、エロチックなものがないわけじゃないけれど、セックスとじかに結びついたものじゃないですね。

暉峻 男に使ったってそうですよ。

田地 それを、へんにゲラゲラ笑ったりするんですよ。しようがないと思うわ。

暉峻 女子学生でも、紅絹裏こうきうらを知らないのが多いですね。

田地 そうでしょうね。紅絹は二十年近く前までは使ってましたよ。うちの子どもが娘の時分には、まだ紅絹裏を着ましたけど。

暉峻 若い人は着物を着なくなったから。

田地 テレビで三十分か一時間、女優さんが左前に着てて、だれも気がつかなかったって話がありますもの。

暉峻 まあ、流し目も知りませんね。(笑)

円地 困りますね、それじゃ。お訳しになるのがむずかしいですね。別のことばにしたら、ぜんぜん感じがでないわ。

暉峻 いままでいえばウインクだけど、これは羞恥感がないですからね。流し目というのは恥ずかしくて、真正面から相手の顔がみられない、それで目を流す。横目ですけれども……。

円地 横目じゃ、色気がない。(笑) やっぱり、流し目でなければだめですね。

暉峻 以前、学生が「間男」がわからないというから、「美德のよろめき」とか「日日の背信」とかいう小説があるだろう。ああ、奥さんが恋をするんですね。じゃあ、「間男」をいまなんというんだ、ときいたら、「奥さんの恋人」というんだそうです。(笑) 江戸時代から明治時代には「あいづ、あそこのおかみさんと間男している」といわれたら、町内にいられなくなる。「間男」は非常に罪悪感と倫理感がつきまとっている重いことばだったんですね。

円地 私たち、明治の生れには、ともかく姦通罪という意識がありますよ。

暉峻 ですから、終戦になるまでは、人妻が恋愛をするというのはたいへんなことだったんですね。命まではとられないけれど、覚悟を要する。でも今は、あの奥さんには恋人がいるという。罪悪感も倫理感もないですよ。

円地 なかなかいいわね、なんて、うらやましがられるんじゃないの。

暉峻 いい時代になりました。(笑) 近代のありきたりの日本語を使って、どうすれば読者にわかってもらえるか。いまの読者にわからなければしょうがありませんからね。